OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語とキルギス語における文法と語彙の連続性 ー自動詞、他動詞、ヴォイスおよび「なる」と「する」を対象にー
Author(s)	Shamshieva, Nazgul
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72347
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論文内容の要旨

氏　名	（SHAMSHIEVA NAZGUL）
論文題名	日本語とキルギス語における文法と語彙の連続性 ―自動詞、他動詞、ヴォイスおよび「なる」と「する」を対象に―

論文内容の要旨

本研究では、日本語とキルギス語の自動詞、他動詞、ヴォイスおよび「なる」と「する」を対象にし、文法と語彙の連続性について考察を行った。同じ膠着語である日本語とキルギス語は、自動詞、他動詞の対応とヴォイス接辞の間の関係に共通している点がある。つまり、両言語は「笑う」「座る」「行く」のように対応する他動詞を持たない自動詞、「書く」「飲む」「持つ」のように対応する自動詞を持たない他動詞が存在する点、また、対応する他動詞のない自動詞に対しては、使役接辞が付いたものが他動詞相当の機能を持ち、対応する自動詞のない他動詞に対しては、受身接辞が付いたものが自動詞相当の機能を持つという点で共通している。ただ、キルギス語には、日本語に見られるような他動詞化と使役化、自動詞化と受動化の間の区別がなく、どちらもヴォイス接辞を使った派生によって行われる。

本研究は、受身、再帰（再帰はキルギス語の場合のみ）、使役の接辞が付き、派生した動詞を取り上げ、自動詞、他動詞とヴォイス接辞による派生動詞との関係を語彙化の観点から考察した。さらに、自動詞と他動詞の対立という観点から、動詞「なる」と「する」の対立についても分析した。

本研究は、（ⅰ）自動詞と受身、再帰はどのような関係にあるのか、（ⅱ）他動詞と使役はどのような関係にあるのか、（ⅲ）自動詞、他動詞と「なる」「する」は、どのような関係にあるのかという三つの関係を明らかにすることを目的とした。

これまで語彙化や意味の特殊化については、先行研究でもしばしば指摘されており、複合語における語彙化（影山 1993、大石 1988、窪園 1995）、形容詞化接辞における語彙化（Brinton and Traugott 2009、Langacker 2011）などが論じられてきた。そのような、複合語などに見られる語彙化、意味の特殊化と同様の現象が日本語とキルギス語の受身、再帰、使役の接辞が付き、派生した動詞にも見られることに注目し、考察を行った。

また、本研究では、自動詞と他動詞の対立という観点から、動詞「なる」と「する」の対立についても分析した。日本語の動詞「なる」は語彙動詞であり、また、名詞、形容詞、動詞に結合し、物事・動作の変化、及び、その変化の結果状態を表す。それに相当する、キルギス語の動詞 *bol-*は、語彙動詞として「①ある、いる、存在する；②なる；③される；④物事が起きる、起こる；⑤（季節・時が）来る；⑥出来る；⑦生じる；⑧行われる」という多様な意味を表す点、また、名詞、形容詞、動詞に結合し、軽動詞あるいは補助動詞として機能する点において、日本語の「なる」と類似するところが多い。そこで、日本語の「なる」とキルギス語の *bol-*を対照させてそれぞれの特徴を探った。

本研究では、次のような構成で考察を行った。まず、第 1 章では、本研究の対象と問題の所在、研究の目的、データの収集方法、研究の構成について述べたのち、キルギス語の概要について述べた。

次に、第 2 章では、日本語の自動詞、他動詞とヴォイス、主に、自動詞、他動詞と自他対応、受身、使役についての先行研究を概説した。

第 3 章では、キルギス語の自動詞と他動詞、ヴォイス、そして、自他対応の派生方向について先行研究の記述をまとめた。

そして、第 4 章では、語彙化とはどのようなものか、その定義、メカニズム、語彙化の例について、先行研究を参照しながら、説明した上で、日本語の自動詞、他動詞に見られる語彙化について述べた。そこでは、語彙化していると思われる日本語の自動詞、他動詞を、具体例を挙げながら、五つに分類し、どのような基準で語彙化していると言えるのかについての考察を行った。さらに、キルギス語の語彙化していると思われる自動詞、他動詞を形態的・意味的・統語的な側面から判定し、考察した。

続く第5章では、日本語とキルギス語の「なる」と「する」について論じた。まず、従来の研究において、日本

語の「なる」とキルギス語の*bol-*について、どのような研究が行なわれ、どのような説明がなされてきたのか概観した。次に、日本語の「〈名詞〉になる」の形式を取り上げ、その形式を、1. 自他対応関係が成り立つ形式、2. 自他対応関係が成り立たない形式、3.「する」が付いているにも関わらず他動詞にならない（サ変動詞）形式の3つに分け、考察した。さらに、「に」をとる名詞と「なる」との組み合わせが固定化し、「〈名詞〉」になる全体で一つの慣用句相当と考えて良いものが存在するということについて述べた。キルギス語の「〈名詞〉*bol-*」について、①*bol-*が本動詞として機能し、物事・出来事の存在の意味を表す用法、②変化を表す本動詞である用法、③軽動詞として機能し、*bol-*の結合によって複合動詞が成立するという用法の三種類があることを指摘した。次に、*bol-*と*kïl-*（する）の対立について、「〈名詞〉*bol-*」が*kïl-*（する）と対になるのは③のみであることを主張した。

さらに、日本語の「ことになる」「ようになる」とキルギス語の「〈動詞〉*bol-*」の形式について考察を行った。キルギス語の「〈動詞〉*bol-*」は、先行する動詞と*bol-*の間に、*-mak, -may, -gan, -day, -ču, -bas*などの接尾辞を挿入することによって始めて成り立つこと、そして、池上（1981, 1982）で述べられていた、「なる」を用いることによって、出来事の事態変化が表され、さらに、動作主よりも状況全体の変化に焦点を置いて表現される、つまり、「なる」文では、ある出来事が個人の意志を超えた何かによって「そのような事態になった」とその状況を中心にして表現するという議論が、キルギス語へも応用可能だということについて述べた。最後に、日本語の「〈名詞〉になる」とキルギス語の「〈名詞〉*bol-*」、日本語の「〜ことになる」「〜ようになる」とキルギス語の「〈動詞〉*bol-*」の共通点と相違点を挙げながら、本章をまとめた。

第 6 章では、本研究で扱っている「連続性」という用語を規定したうえで、第 4 章と第 5 章で行った考察をもとに、日本語とキルギス語における文法と語彙の連続性について、具体的には、文法的な自動詞（＝受身、再帰）と語彙的な自動詞の連続性、文法的な他動詞（＝使役）と語彙的な他動詞の連続性、自動詞、他動詞と「なる」「する」の連続性について論じた。最後に、第 7 章で本研究のまとめと今後の課題について述べた。

以上のような考察や議論を行った結果、本研究では以下のように主張した：

- 日本語において形式上、受身の接辞「(ら）れる」や使役の接辞「(さ）せる」が付加し、文法的な自動詞（＝受身)、文法的な他動詞（＝使役）になっているが、意味上、語彙的な自動詞、語彙的な他動詞になっている動詞が存在する。

- 「相手の気迫に呑まれる」「安さに釣られる」「原稿用紙にペンを走らせる」「頭を悩ませる」などのような表現を本研究では、「慣用的な受身、使役」と呼ぶ。これらの表現は、形の上では、受身、使役の接辞が付いているが、「受動－能動」「使役－非使役」という対応関係が成立しない、つまり、受身や使役を元の形に戻せないという点で、文法的な規則から外れている。従って、これらの表現は、形式上、「(ら）れる」が付く文法的な自動詞、「(さ）せる」が付く文法的な他動詞であるにも関わらず、意味上、語彙的な自動詞、語彙的な他動詞の性質を持つものになっている。

- キルギス語において形式上、受身接辞、再帰接辞、使役接辞が結合し、文法的な自動詞、他動詞になっているにも関わらず、意味上、語彙的自動詞、語彙的他動詞の性質を帯びているものが存在する。

- キルギス語の「語彙化した自動詞、他動詞」の中に「まわる－まわす」「のこる－のこす」「なおる－なおす」「わたる－わたす」などのような「両極化転形」（奥津 1967）と呼ばれる自他対応と同様の対応パターンを持つものがある。

- 日本語とキルギス語の動詞「なる」「する」は、多くの場合、自動詞、他動詞を形成する。

- 日本語において「〈名詞〉になる」の形式が固定化し、慣用句相当であるものが存在するが、同様に、キルギス語においても名詞と *bol-*の緊密性が高い複合動詞が成立する。

- 日本語とキルギス語における文法的な自動詞、他動詞は、形の上では、受身接辞、再帰接辞（再帰接辞はキルギス語の場合のみ)、使役接辞が結合し、文法的になっていることは間違いないが、意味上、語彙的な自動詞、語彙的な他動詞になっている場合がある。この種の動詞を本研究では、「語彙化した自動詞、他動詞」と呼び、

さらに、これらの動詞は、ちょうど文法と語彙の境界線にあるもの、すなわち、語彙的なヴォイスと文法的なヴォイスの境界に位置するものとして考えている。この考えを通して、Langacker（2011）の言葉を借りて言えば「語彙と文法の間には明確な境界を設定しない」という主張は、語彙的な自動詞、語彙的な他動詞と文法的な自動詞、文法的な他動詞にも当てはまると言える。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名（SHAMSHIEVA NAZGUL）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主査　教授	今井　忍
	副査　准教授	藤家　洋昭
	副査　准教授	山川　太
	副査　教授	岸田　泰浩
	副査　教授	三原　育子

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語とキルギス語における自動詞、他動詞、使役、受身、「なる」表現、「する」表現の対照を通して文法と語彙の連続性について考察するものである。

キルギス語は類型的には日本語と同じ膠着語に属するとされるが、語彙的な自動詞と他動詞の対立は少なくとも形式的にはほとんど存在せず、一項動詞と二項動詞の対応はほぼすべてが使役、受身、再帰の３種類のヴォイス接辞による派生の形になっている点で日本語と異なっている。しかし、形式的な側面だけでなく、意味的な特徴、用法上の特徴を詳細に観察することで、これらが一律に文法的派生によるものではなく、日本語で言う自他対応に相当する性質を有するものが存在することを本論文は明らかにしている。

本論文の第２章では、日本語の自動詞、他動詞、受身、使役がこれまでどのように定義され、説明されたかを主要な研究を基に概説し、第３章では、キルギス語における自動詞、他動詞およびヴォイスに関する従来の研究を概観している。

さらに、第４章では、語彙化という観点から、両言語の動詞について考察している。日本語では、語彙的使役と統語的使役という形式上の違いがあるため、その両者の意味的・統語的性質の違いが盛んに論じられてきたが、キルギス語ではそのような観点での記述がほとんどなされていないことが指摘されている。さらに、日本語にも形態的には使役・受身の形式を持つにもかかわらず語彙的な性質を持つものがあることを示し、それを５つに分類している。また、これらが持つ特徴に基づいて、形式的には使役・受身形であるキルギス語の動詞形の中に語彙的な性質を持つものがあることを示している。

第５章では、日本語の「なる」と「する」、および、キルギス語の*bol-*と*kïl-*の諸特性について論じ、いくつかの観点から、「なる」と「する」の対立が*bol-*と*kïl-*の対立と平行的であること、この関係が第４章で論じられた自他の対立と類比しうることが指摘されている。

第６章では、これまでの議論を基に、日本語とキルギス語における文法と語彙の連続性について論じている。両言語は形式的には自他対応の有無において異なっているものの、意味的な特徴には共通した点があり、それらが形式的な区別と一定の関係を持ちつつ連続的に規定されることを示している。これは、Langackerが提唱する語彙と文法の連続性というテーゼに合致すると主張している。

本研究の重要性は、以下の２点にあると考えられる。まず、従来のキルギス語研究ではほぼ等閑視されてきた語彙的自他対応が日本語と同様に存在するという指摘である。これは、日本語に関する研究成果をキルギス語に応用することで得られた新しい知見であると言える。次に、日本語においてもキルギス語においても、慣用的使役、慣用的受身という視点を提供した点である。慣用的受身については、日本語の研究においては従来指摘されてきたものであるが、同様の現象が使役形についても存在すること、また、それがキルギス語の動詞にも見られること、さらに、それが派生動詞の語彙化の特徴の一つになっていることを明確に示したことは、この分野の研究に対する重要な貢献だと言える。

とはいえ、本研究にはいくつかの問題点が残されていることも確かである。まず、ここで言う文法

と語彙という概念がどのような理論的な背景を持つのかが十分に論じられていない点である。文法（統語）と語彙の境界という問題は、従来生成文法の枠組みで盛んに論じられてきており、Langackerのテーゼもそのような背景のもとで理解される必要があるが、本論文ではその点が十分に明らかにされていないため、それぞれの現象や指摘が統一的な枠組みに位置づけられていない点が惜しまれる。また、キルギス語の現象を考察する際に、先行研究の記述に依存しすぎる傾向がある点も問題と言える。実際の用例やネイティブの容認性判断などを取り入れてより十全な記述を目指すべきだったと思われる。

このような瑕疵は見られるものの、論述全体は簡潔にまとめられており、日本語とキルギス語の動詞形の対照というこれまで例のない視点で一つの大きな図式を提示することに成功していることは十分に評価に値する。今後、記述的にも理論的にも考察を深めていくことで、さらなる学術的成果が得られることが期待される。

以上の審査結果を踏まえて、本論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断し、審査委員会全員の一致により合格という結論に至った。